春の声

文責：野口

ヨハン・シュトラウス2世（Johann Strauss Ⅱ，1825.10.25－1899.6.3）による1882年の作品。ラ・カンパネラ、死の舞踏などを作曲した親友フランツ・リスト（当時71歳）と即興演奏パーティーで同席した際、余興で作曲したとされる。当時ヨハン・シュトラウス2世は3度目の結婚を果たしており、新妻を迎えた喜びや幸福感が曲想に反映されているとの逸話もある。

冠々はソプラノ向けの歌曲

初演は1882年3月1日、オーストリアのアン・デア・ウィーン劇場で行われた。コロラトゥーラ・ソプラノ歌手のビアンカ・ビアンキのためにオーケストラ伴奏付きの歌曲として発表された。（コロラトゥーラ・ソプラノとは、18～19世紀のオペラのアリアなどに好んで用いられた声楽で、トリルなどの技巧的な装飾に富む華やかな旋律、コロラトゥーラを歌うのに適した、軽快で柔軟な声のソプラノである。）1987年のウィーンフィル・ニューイヤーコンサートでは、アメリカ出身のソプラノ歌手キャスリーン・バルトの歌声に乗せてこの曲が披露された。なお、当該

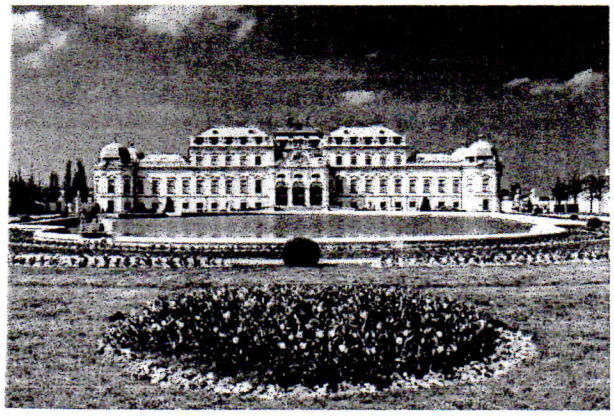
コンサートにおいてゲスト歌手が招かれることは滅多にない。当時の指揮者はヘルベルト・ウォン・カラヤン。

♪ 歌詞一部抜粋

ヒバリは青空高く舞い上がり、
凍てついていた風もこんなに暖かくなった。
その喜びあふれる優しい吐息は活気づいて
そしてくちづけるの 野に、牧場に。
春は 美しい装いで目覚め、
ああ、ああ、ああ
すべてつらいことは終わるでしょう、
あらゆる悩みも 遠くへ去ってゆくわ！

痛みはやわらいで、陽気な姿で、
幸せを信じる気持ちがかえってくる。
太陽の光が差し込んできて、
ああ、みんなほほえみ、ああ、目覚めるの！

（歌詞は、オペレッタ「こうもり」などの台本も手掛けた台本作家リヒャルト・ジュネ（Richard Genée, 1823.2.7-1895.6.15）によってつけられた。）



◀ベルヴェデーレ宮殿
（オーストリア・ウィーン）

〈参考
：世界の民謡・童謡 worldfolksong.com 等